繊維ニュース　2006年11月14日

トレーサビリティーできる商品作りがカギに（マダガスカルの綿花農場＝大正紡績提供）

コラボによるモノ作り

「環境」「健康」にヒント

同様に機業などとのコラボを展開する東海染工。八代芳明社長は「日本のアパレルは日本独自の高感度なテキスタイルを求める。川中企業も生き残りのために日本独自のモノ作りを追求する。両者の考え方は一致しているのに、それがうまく流れないのはなぜか」と問題提起する。

八代氏はその原因を、流通各段階における安易なリスク回避にあると指摘する。「在庫は悪」と認識しながらも、「リスクを各段階で分散させる新たなビジネスモデルが必要」と提唱する。「繊維業界全体で考えていく時期にきていることは間違いない」との思いは多くの関係者が指摘するところである。

モノ作りでユニークな道を歩む大正紡績。オーガニックコットンや枯葉剤を使わないエコロジーコットンなど素材開発で、アパレルや流通関係者の注目を集める。とくに力を入れているのが、世界の様々な地域で栽培される希少綿花の発掘と商品化だ。近藤健一取締役営業部長は「特殊な綿花を使うことで、中国など海外品と根本的な差別化ができる」と強調する。

同氏はまた、トレーサビリティー（原材料の出所から加工、流通、販売までの情報が追跡可能なこと）の重要性を指摘する。地球環境問題、それに派生する健康問題が年々深刻になるなかで、この環境・健康の視点での取り組みが今後重要なカギを握るという。

最近、同社はマダガスカル綿を商品化した。同国は近代的農法が未成熟なこともあり、結果的にオーガニックコットンに近い栽培過程が残されていた。また、労働力が豊富で、手摘み収穫を確実に行える点に注目した。もう一つは貧困の解消だ。現在でも世界最貧国の一つで、綿花を輸出産業として育成すれば、結果的に現地での雇用を創出し、農業を発展させることができる。

「環境」「健康」への配慮は、結果的に国際競争力の強化につながる。この事例に住み分けへの一つのヒントが隠されている。